

2013年度U-14ナショナルトレセン(前期)の視察からの考察

報告者: 池谷 孝 (清水エスパルス・県指導者養成委員長)

- 目的: 選手の観察と指導の観察から指導を俯瞰する
- 分析対象: U-13, U-14選手
- 報告対象者: 若くて野心ある各カテゴリ指導者
- 期間: 2013.5月23日~26日(視察は23日~25日)
- 流れおよび全体像: 3泊4日のテーマごとのトレーニングとゲーム(プログラムは別紙PDF)

■課題の発見と分析と提言

▶13歳と14歳の違い(13歳の指導に注目)

両者には体格、スピード、プレーの力強さなどに大きな格差があることがわかります。いずれもフランスでいうプレ育成年代ですが、14歳は、15歳のサッカーに近いですが、13歳は、12歳のサッカーに近いと見えます。U-12年代のサッカー、キッズ年代の育成がますます注目を浴びようになってきている中、13歳の指導のたいせつさを強く感じました。

技術を細部にわたって身につけること。その技術をゲームで活かしきる安定したメンタリティを養うこと、そのために自分のプレーを分析し整理する工夫(*サッカーノート、VTRによる自己分析)。さまざまなゲームシチュエーションのゲーム的トレーニングやゲームを通してサッカーフィーリングやコンビネーションの作り方(自分の活かし方、味方の活かし方)を養うこと。まずオンのプレーをしっかりと身につけること。それに付随して攻撃ではパス受け手との関係性を構築すること、守備ではアプローチとカバー(奪う)くらいまではしっかりと修得させることが肝要と再確認しました。

15歳、18歳に向けて、「個のサッカーを育てる」という意味で13歳を指導する指導者の責任は重いと痛感しました。

*因みに磐田の山田選手は学生の時から継続して行い、安定したプレー、より高いレベルのプレーが可能になったそうです。

▶教え込むのか、自分で考えさせるか、その先にある指導は?

Jクラブの選手が大多数を占めるメンバーでかつチームを作るための目的を持たないキャンプに対し、技術、戦術その他をどこまで指導するという事は議論すべきだと思いますが今回はそれには触れません。

6回のトレーニングという時間的制約もあってか、教え込みの強いトレーニングであったと思います。

CSでは度々「コーチング」について触れてきました。どの年代の指導でも、選手の考えやポジティブなメンタリティから生まれる自主的な判断とプレーを引き出す指導はスタンダードであると考えますが、その先にある指導とはどういうものでしょうか。

フランスパリサンジェルマンの育成統括ベルトラン・ルゾー氏のいう「選手の問題解決を引き出す指導は、意味はあると思うが限界もある。指導者が選手目線で判断してはいけない。あくまでも選手は指導者の目線まで上がってこなくてはならない」という考えはひとつの答えを示しているように私は考えます。

今回の視察からはやや飛躍しますが、選手を育成するということは、チーム構築に行きつく流れの中にあるものです。もちろん、原理原則を保ちつつそれぞれの指導者自身が考えるサッカーからの逆算であると思いますが、技術を教え、選手自身の問題解決を促しながら最終的には監督のサッカーのイメージ(主観的なもの)を選手に与えるというのがサッカー指導の流れだと考えます。いつも教え込む、あるいはいつも考えさせるばかりではなく、指導者が現象の分析と改善を強く意識しながら、指導について整理し目標に到達するのがサッカーの指導であると改めて想起しました。

■クエスチョン

- 1)あなたなら何を指導しますか？
- 2)あなたならどう指導しますか？
- 3)あなたならトレーニングをどう発展させますか？

対 象： 14 歳

テーマ： 4対4 の守備のトレーニング(NTC でのテーマのひとつ)

…オーガナイズを小さくして3対3 でもいいです。

